

磯部光章名誉教授は昭和 53 年 3 月に東京大学医学部を卒業し、昭和 55 年 1 月に三井記念病院医員として採用された。昭和 60 年 8 月には東京大学医学部第 3 内科学助手に就任し、昭和 61 年 9 月には「血中心筋ミオシン軽鎖 II 値測定による冠再灌流後の心筋梗塞量の定量的評価:覚醒犬による実験的検討」により医学博士の学位を授与された。昭和 62 年 8 月、米国ハーバード大学マサチューセッツ総合病院心臓内科に研究員として国費給付留学ののち、平成 4 年に帰国して同年 5 月に東京大学医学部第 3 内科学助手に帰任した。平成 5 年 7 月には信州大学第 1 内科助教授に就任した。

その後、同人は平成 11 年 10 月に東京医科歯科大学医学部第 3 内科助教授として採用され、平成 13 年 4 月に本学の改組に伴い誕生した大学院医歯学総合研究科器官システム制御学系呼吸循環病学講座循環制御学教授に就任した。平成 16 年 4 月には講座名変更に伴い大学院医歯学総合研究科器官システム制御学系呼吸循環病学講座循環制御内科学教授に就任し、今日まで情熱的に臨床・研究・教育・病院運営に従事してきた。

同人が本学循環制御内科学教授に着任して以来、旧第 1・第 2・第 3 内科に分かれていた循環器内科診療グループをまとめ上げ、16 年間で本学医学部附属病院における循環器疾患の年間入院患者数を 2 倍以上に増加させた。また、治療の質の向上にも努め、虚血性心疾患・不整脈・心不全の治療レベルを国内最高水準にまで押し上げた。殊に、重症心不全の診療については本学医学部附属病院を心移植実施施設以外では最多の人工心臓植え込み数および心移植施行数を誇る施設とすることに大きく貢献した。この間、平成 16 年と平成 26 年の東京医科歯科大学医学部附属病院長補佐、平成 17 年の医療材料管理委員会委員長、平成 20 年の受託研究・寄附監査委員会委員長をはじめとする数多くの役職を務め、本学ならびに病院の発展に大きく寄与した。地域医療の振興にも熱心に取り組み、茨城県、埼玉県、静岡県、千葉県の間総地域、長野県の北信地域など医師充足率が全国でも最下位群にある地域への医師派遣を積極的に行った。なかでも、茨城県に関しては茨城県循環器地域医療学講座を開設して、医師不足の解消に奔走するだけでなく限られた人数で充実した地域医療が行えるようにするための循環器疾患におけ

る遠隔医療についての研究を精力的に行った。

同人は学内では本学医学部卒業生によるベストティーチャー賞を6回、ベストプロフェッサー賞を1回受賞するなど本学医学部学生の教育に多大なる貢献をもたらした。また、在職中には東京大学、信州大学、筑波大学、秋田大学等の医学部で非常勤講師として講義を行い、さらに各地からの依頼を受け多くの講演を行ったり市民公開講座を多数主催したりしたほか、共用試験実施機構医学系OSCE委員会の部会長等を歴任するなど全国的なレベルで医学の教育向上に寄与した。今までに学位取得者90名を輩出し、医学の将来を担う医学研究者の育成にも大きく貢献した。

先に述べた医学教育制度の改革に加えて、医学の診療および研究制度の改善にも積極的に取り組み、厚生労働省における数多くの委員会や研究班の構成員や委員長、日本学術振興会科学研究費委員会専門委員、難病情報センター情報企画委員、日本医師会学術企画委員等数々の要職を歴任するなど、我が国の医療行政における幅広い分野で主導的に様々な改革に力を注ぎ、医学界の発展・向上に尽力した。2014年10月には日本学術会議第23期会員に選出され、我が国の科学の発展のために医学分野を代表する有識者として提言を発信し続けている。

国際的にも国際移植学会、国際血管生物学会議、米国心臓協会、国際心臓研究学会など数多くの国際学会の外部委員等を務めるなど、日本と諸外国との間で多くの研究者交流に関与してきたほか、各国からの依頼を受け多数の講演を行い、世界的な医学の向上に多大なる貢献をした。

同人は基礎研究で得られた知見をもとに心臓移植片拒絶の診断法や移植片拒絶反応抑制剤を考案・開発（欧州・米国で特許取得）し、心臓移植医療で課題となっている慢性拒絶反応の克服に向けて多大なる貢献を行った。このように心臓移植免疫の分野で顕著な業績を挙げたことから我が国における心臓移植医療の第一人者となり、日本循環器学会心臓移植委員会委員長、心臓移植関連学会協議会実施施設認定審議会議長、補助人工心臓施設認定委員会副委員長などの要職を歴任して我が

国における心臓移植の再開およびその発展に尽力した。また動脈硬化症や心不全など心血管疾患の成因についてNF κ Bを中心とする細胞内シグナルやオートファジーの関与など数多くの分子機序を明らかにし、本分野研究の第一人者として、これまでに*Cell, Science, Nature Medicine*をはじめとする数多くの一流誌に論文を発表してきた。これらの知見を臨床応用すべく、冠動脈狭窄症に対する新規の治療法として我が国初の遺伝子溶出ステントの開発に携わった。さらに、心サルコイドーシスや高安動脈炎といった炎症を基盤とする心血管疾患について病因の探索から新しい診断法の確立、さらには新規治療法の導入に至るまで幅広いカテゴリーで顕著な業績を挙げたことからこれらの疾患の診療に関する世界的権威と認知されるに至り、我が国のみならず海外からも同人による診療を求める患者が後を絶たない。

この他の循環器疾患の臨床についても造詣が深く、これまでに多くの疾患の診療ガイドラインの作成に携わり、心臓移植は班長、高安動脈炎は分科会長としてこれらのガイドラインの作成を主導した。

加えて、同人はこれらの臨床・教育・研究に携わるのと同時に、日本心不全学会理事長を務め、その重責を果たし組織改変に尽力した。また日本内科学会理事、日本循環器学会理事、日本脈管学会理事、日本心臓病学会理事、国際心臓研究学会日本部会理事、日本適応医学会理事、日本循環制御医学会理事、日本サルコイドーシス/肉芽腫性疾患学会理事、日本心臓移植研究会副代表、など学協会の役職を兼務し、さらに第14回日本適応医学会（平成22年7月）、第14回日本心不全学会学術集会（平成22年10月）、第29回日本心臓移植研究会学術集会（平成22年10月）、第28回国際心臓研究学会日本部会会長（平成23年12月）、第1回日本心筋症研究会（平成27年7月）、第56回日本脈管学会（平成27年10月）等数多くの学術集会を会長として主催するなどこれら専門領域の学術の発展に大きく寄与した。

以上のように磯部光章名誉教授は、永年にわたり循環器内科学分野における研究に尽力し、関連領域においても優れた業績を残すとともに、医学教育・診療・研究制度

の改善を推進しリードし、さらに国際交流を図り諸外国との架け橋となる礎を築く等、教育、後進の育成にも多大なる貢献を果たしたことにより本学名誉教授として列せられ、その功績を称えるとともに、未永くその名を本学にとどめることとなった。